



日本医療政策機構（HGPI）

グローバルヘルスの精神的基盤をリデザインする

キックオフ・パネルディスカッション

アフリカと日本を起点に、世界各地の知と共に醸成する
哲学対話プラットフォーム

Health and Global Policy Institute (HGPI)

Redesigning the Spiritual Foundations of Global Health

Kick-off Panel Discussion:

**“From Africa and Japan, Drawing from Perspectives Around the World:
A Platform for Cultivating a Philosophical Health Dialogue Together”**



HGPI Health and Global
Policy Institute

開催趣旨

グローバルヘルスは構造的な転換点を迎えている。米国国際開発庁（USAID: United States Agency for International Development）をはじめとする欧米諸国を中心とした従来の援助国の支援の後退、援助（aid）から投資（investment）へのパラダイム転換、そして何よりアフリカの自国主体性（African agency）の高まり、アフリカにおける資本コスト是正と新しい開発金融の要請など、政策・金融両面で従来の枠組みの問い直しが進んでいる。

ここで重要なのは、アフリカン・エージェンシーの高まりが、単に資金スキームの主体や開発の意思決定者が変わるという話に留まらないことである。アフリカ側から発せられているのは、人間とは何か、健康とは何か、共同体とは何か、開発とは誰にとってのものか、という、人間観・関係観そのものの根本的な問い直しである。人間を関係性のなかで捉える哲学的伝統が、政策・金融の議論に対して、もう一段深い問いを投げかけている。この問いは、決して抽象的な思想論ではない。グローバルヘルスの現場では、技術や資金だけでは動かない事象が繰り返し観察されてきた。ワクチンの普及は、供給量や物流の問題に留まらず、コミュニティにおける信頼と共同体的判断によって規定される。緩和ケアや終末期医療の質は、医療技術と同等に、家族・地域・宗教者の関わりによって左右される。メンタルヘルス、母子保健、感染症対応、いずれの領域においても、医療システムの設計だけでは閉じない、人間関係と信頼と意義の次元が決定的な役割を果たしている。

こうした事象に対して、技術論や金融工学の言語だけで応答することはできない。ここで問われているのは「人間が他者の生老病死（生まれ、老い、病を得て、死ぬという人間の根本的な苦しみ）にどう関わるか」という、精神的・倫理的な次元の問いである。この次元の問いは、グローバルヘルスの根底に常に横たわっていたものであり、パラダイム転換のなかで改めて顕在化しつつある。近代以降、医療と公衆衛生は専門分化を通じて目覚ましい成果を積み上げてきた。生老病死をめぐる事象が技術と制度のなかに位置づけられたことで、人類は感染症の制圧、寿命の延伸、医療アクセスの拡大を実現した。一方で、専門分化が進むなかで、医療と、家族・共同体・宗教・倫理といった隣接領域との架橋が、議論の場として確保されにくくなったことも事実である。医療政策の最前線においては、隣接領域との対話なしには応答できない課題が増えていることが、改めて認識されつつある。

こうした状況に対して、日本とアフリカは、見落とされがちであった共通の知的基盤を有している。日本における縁起・自他非分離の思想、すなわちあらゆる存在は他者との関係のなかで成り立つという、日本文化に通底する関係性的人間観と、南部アフリカを起源とするウブントゥ（Ubuntu）の思想、すなわち「私は、あなたがいるから私である（I am because we are）」という共同体的人間観は、いずれも人間を孤立した個ではなく、他者との関係性のなかで存在する存在として捉える哲学的伝統である。両者は別個に発展してきたが、生老病死を共同体的・関係的な営みとして捉える点で深く共鳴する。

本プラットフォームは、この日本の「縁起」とアフリカの「ウブントゥ」の哲学的共鳴を起点としつつ、そこで立てられた問いをグローバルなアドボカシー、信仰倫理、開発実務の文脈と接続する開かれた対話の場である。同様の知恵や伝統は、世界各地の哲学的・信仰的・文化的な営みのなかに眠っている。たとえば、東南アジアの紛争地で積み重ねられてきた和平構築の実践は、対立する共同体のあいだに関係性を回復させる営みであり、生と死、赦しと共生をめぐる固有の知恵を宿している。イスラムの伝統もまた、ウンマ（共同体）における相互扶助や、生老病死を信仰共同体のなかで意味づける豊かな死生観を有している。これら

は、ウブントゥや縁起の思想と響き合う。対話の積み重ねを通じてこうした世界各地の知を掘り起こし、共鳴の地図を広げていく。

本イベントを皮切りに、産官学民で、医療政策、開発金融、医療人類学、哲学、信仰倫理など、異なる専門領域を超えて議論を重ね、2028年開催予定の第10回アフリカ開発会議（TICAD: Tokyo International Conference on African Development）に向けた発信を目指す。

共同設計者

本プラットフォーム・企画は以下の共同設計者のご参画のもと、実施しております。

Alaa Murabit（Lancet-Georgetown Commission on Faith Trust & Health 委員／国連 SDGs グローバル・アドボケイト）

Adrian Lovett（The ONE Campaign 英国・中東・アジア太平洋地域 エグゼクティブ・ディレクター）

渋谷 健（シブサワ・アンド・カンパニー株式会社 代表取締役／経済同友会 中東・アフリカ委員会筆頭委員長）

野村 将揮（ハーバード大学 Doctoral Researcher／一般社団法人京都哲学研究所 Executive Advisor 兼 Chief Strategist）

乗竹 亮治（日本医療政策機構 代表理事・事務局長／Human Activity Research Laboratory 共同創設者）

堀場 明子（笹川平和財団 和平調停センター センター長）

松本 紹圭（僧侶／武蔵野大学ウェルビーイング学部 教授）

Wakanyi Hoffman（African Folktales Project 創設者）

開催概要

- **日時**：2026 年 6 月 15 日（月）13:00-15:00
- **形式**：対面（オンライン配信なし）
- **会場**：国際文化会館（東京都港区六本木 5 丁目 11-16）
- **言語**：日本語・英語（同時通訳あり）
- **主催**：日本医療政策機構（HGPI）

プログラム（敬称略・五十音順）

13:00-13:05

開会挨拶

乗竹 亮治（日本医療政策機構 代表理事・事務局長／

Human Activity Research Laboratory 共同創設者）

13:05-13:30

基調講演

松本 紹圭（僧侶／武蔵野大学ウェルビーイング学部 教授）

Adrian Lovett（The ONE Campaign 英国・中東・アジア太平洋地域

エグゼクティブ・ディレクター）

13:35-14:55

パネルディスカッション

パネリスト

Adrian Lovett

渋澤 健（シブサワ・アンド・カンパニー株式会社 代表取締役／

経済同友会 中東・アフリカ委員会筆頭委員長）

野村 将揮（ハーバード大学 Doctoral Researcher／

一般社団法人京都哲学研究所 Executive Advisor 兼 Chief Strategist）

堀場 明子（笹川平和財団 和平調停センター センター長）

松本 紹圭

モデレーター

乗竹 亮治

14:55-15:00

閉会挨拶

松本 紹圭

基調講演 (1)

松本 紹圭（僧侶／武蔵野大学ウェルビーイング学部 教授）

グローバルヘルスの資金危機の奥にある“深い問い”

主要な各国政府の対外援助の縮小や地政学的リスクをはじめとしたさまざまな事象により、グローバルヘルスは危機に瀕している。その多くの議論は資金調達に収束しているが、2500年にわたって生老病死に寄り添ってきた仏教の視点から俯瞰すると、その議論のより奥には“深い問い”が存在する。それは「自分とは関係のない他者の生老病死を、どのようにケアするか」ということである。現代の医療と政策は、自律した個人を中心に組み立てられている。私たちは個々の身体を測定し、治療し、「どうやって個人にサービスを届けるか」を視点に取り組んだ結果、寿命は延び、病は抑えられてきた。しかし、例えば、ワクチンが届くかどうかは物流システムだけではなく、コミュニティ自身が持つ信頼と結束によって左右される。このようなデータや制度的枠組みでは行き届かない「精神性の次元」の視点からグローバルヘルスの取り組みについて問い直すことが、今まさに求められている。

「人間は孤立した個人ではなく関係性の中から立ち現れる」という縁起とウブントゥの共鳴

精神性をグローバルヘルスに回復させるための言語として、まず仏教の根本概念である「縁起」がある。縁起とは「全てのものは関係の中から生まれる——それだけでは何も存在できない」ということだ。禅の師ティク・ナット・ハンは、私たち人間が分離した存在ではなく常に「共に在る」存在であることを指すこの概念を「インタービーイング」と英語で表現した。また、縁起と響き合う概念として、アフリカ南部を起源とする「ウブントゥ」も挙げられる。「I am because we are（私たちがいるから、私は存在する）」で知られるウブントゥは、縁起とは異なる歴史・言語を持つが、「人間は孤立した個人ではなく関係性の中から立ち現れる」という点で深く共鳴する。二つの哲学的伝統による共通の視点は、個人中心の近代医学や政策を越え、医療・家族・コミュニティ・信仰の間に引かれてきた境界線を、分断や対立としてではなく関係性を編み直す「共鳴」の機会として捉え直すことを求めている。

「良き祖先」となれ

各文化が培ってきたウブントゥと縁起は、単なる過去の遺産ではなく、グローバルヘルスの営みにおける生きた共通の言語である。私たちはこれらを各地域だけの宝に留めず、世界中が分かち合う共通の財産として、日々の取り組みの土台に据えるべきである。なぜなら、健康や医療は今を生きる世代だけのものではないからだ。今日の保健医療は次の世代に引き継がれるものであり、保健医療政策や開発援助の意思決定は、まだ生まれていない世代の生老病死をすでに形作っているといえる。私たちはこの世代を超えた責任を自覚し、縁起とウブントゥを人類共通の財産として活かしながら、人類のよき未来を形作る「良き祖先（Good Ancestor）」を目指すべきである。



基調講演 (2)

Adrian Lovett (The ONE Campaign 英国・中東・アジア太平洋地域 エグゼクティブ・ディレクター)

グローバルヘルスと国際協力における精神性の危機

昨今のグローバルヘルスと国際協力は重大な局面に直面している。表面的には、主要国政府による支援の削減といった資金の危機が取り上げられるが、問題の本質は「人々がなぜ互いをケアしようとするのか」という哲学的・精神的基盤が失われつつあることである。医療システムの構築や資金調達といった「手段」の議論は充実しているものの、健康や人間が繁栄するとはどういうことかという「目的」の議論が決定的に不足している。この危機は単なるお金の投入だけでは解決できない。支援の根底にある「意義」の再構築が必要不可欠となっている。

宗教的共同体がもたらす道徳的実践と社会的価値

意味の再構築が成功した例として、1990 年代後半から 2000 年代初頭にかけて展開されたジュビリー2000 (Jubilee 2000) キャンペーンがある。世界最貧国が抱える返済不能な債務の帳消しを求めるこの国際的運動の目的は、債務返済ではなく病院や学校に資金を投じることを促し、グローバルヘルスを進展させることであった。しかし、経済的合理性をいくら訴えても、長年にわたって各国政府は動かなかった。

転機は旧約聖書の「ジュビリー (ヨベルの年)」にある。およそ 50 年ごとに負債を赦し、人々を束縛から解放するという概念に、訴え方を替えたことだった。負債は不正義であり、その帳消しは慈善ではなく正義の実践であるという語り口は、特定の宗教を信じない人々にも強く響き、各国政府も訴えに応じるようになった。結果、40 から 50 の国でジュビリー運動が生まれ、最終的に 1,000 億ドル近い債務が帳消しとなった。

また信仰には実践的な力もある。英国の国際開発ネットワーク BOND の調査では、宗教的共同体を介した 1 ポンドの外部投資が 28 ポンドの社会的価値を生み出すと報告されている¹。政府や NGO が届かない地域での高い信頼性と正当性や、昨今猛威を振るうエボラウイルス病への対応などの最前線における圧倒的な実践力が証明されている。ただし、信仰に基づく主体が有害な規範を固定化することもあり得る。その両面を認識したうえで、宗教的共同体との連携を設計することが求められている。

グローバルヘルスにおいて信仰と意義が果たす役割

The ONE Campaign は宗教的共同体ではないが、信仰を持つリーダーたちと緊密に連携している。グローバルヘルスや貧困に対する議論で信仰の言語が介在するとき、その議論は異なる次元へと引き上げられることを実践の中で知っているからである。

なぜ、信仰の言語には国際政治や現場の実務をも動かす強い力があるのか。社会心理学者のジョナサン・ハイト (Jonathan Haidt)²は 2 つの観点から見解を示している。第一に、宗教的共同体には、グローバルヘルスを

¹ Tearfund. (2023, March 26). Churches are the local superheroes of international development, creating £28 worth of social value for every £1 invested, study shows. <https://www.tearfund.org/stories/media/press-releases/2023/03/churches-are-the-local-superheroes-of-international-development>

² 米国の社会心理学者。ハイトの道徳的基盤理論によれば、人間には「ケア」「公正」「自由」「忠誠」「権威」「神聖さ」の 6 つの道徳的基盤が備わっている。西洋 (Western)・高教育 (Educated)・産業化 (Industrialized)・富裕 (Rich)・民主主義 (Democratic) (WEIRD と表現する) 的な社会では、この道徳的領域が縮小し、主にケアと公正の 2 基盤に依拠する傾向がある。宗教的共同体を含む非 WEIRD 社会の大多数は、忠誠・権威・神聖さを含む全基盤を使用しており、WEIRD な諸制度はこれらの道徳的言語を見失っている。

Haidt, J. (2017, October 19). *The psychology of self-righteousness* [Radio interview transcript]. On Being with Krista Tippett.

<https://onbeing.org/programs/jonathan-haidt-the-psychology-of-self-righteousness-oct2017/>

Schuman, J. (2018, July 15). *Understanding political differences through moral foundations theory*. Divided We Fall.

<https://dividedwefall.org/the-righteous-mind-moral-foundations-theory/>

設計してきた西洋の諸制度が軽視してきた「神聖さ (sanctity)」「忠誠 (loyalty)」や「自己超越 (self-transcendence)」³ に関する言語や思想がある点である。第二に、宗教的共同体では、共有された儀礼と集団的な経験が「ハイブ・スイッチ」を作動させる条件を継続的に提供する点である。これは個人の自己利益を超えて、自分より大きな何かの一部であると感じる能力を指す。これが保健医療システムにおいて困難に直面する瞬間に、宗教をリードする存在が不可欠であるとする理由である。

作家のアレックス・エヴァンス (Alex Evans) は、かつて信仰が担ってきた集合的な意義形成、悲嘆の処理、共同体への所属という機能が失われたことで、危機に対処する社会の集合的な能力の中心に空白が生じていると指摘する⁴。主要国政府によるグローバルヘルス支援の削減はその一例であり、資金の危機であると同時に、グローバルヘルスがなぜ重要で誰のためにあるのかという共有された物語の崩壊を示している。グローバルヘルスの危機は資金の補てんという手段によって解決されるものではなく、意義と目的の再構築を必要とするのである。

信仰から人間観の深層へ：共鳴する哲学的・精神的基盤

信仰および宗教的共同体が何をするのかという問いの背後には、「人間がどういった存在であるのか」という、より深い哲学的な問いがある。例えば、ウブントゥは信仰の伝統ではなく、人間とは何かについての哲学的・精神的な主張である。ケニア共和国の哲学者ジョン・サミュエル・ムビティ (John Samuel Mbiti) が「私があるのは、私たちがいるからだ。そして私たちがいる以上、ゆえに私はある (I am because WE are and, since we are, therefore I am)」と表現したように、自己とは独立した出発点として存在しているものではなく、他者との関係性とながりの中で作られるものだという捉え方である。

2025 年 11 月のヨハネスブルグ G20 の首脳宣言では、「ウブントゥの精神のもと、私たちは個々の国家が孤立して繁栄することはできないと認識する」と発信された⁵。アフリカの哲学的伝統が、世界で最も強力な経済フォーラムの中心に据えられた瞬間である。

このウブントゥと日本の縁起は、現代のグローバルヘルスとは異なる出発点を示唆している。すなわち、「どうやって個人にサービスを届けるか」という西洋的なアプローチではなく、「人はどのように人生の節目を通して互いを支え合うか」という関係性を重視する問いへの転換である。

「生存 (Survive)」から「繁栄 (Thrive)」へ、そして「希望」の力

人間を他者との「関係性」において捉える思想は、手段の議論に終始しがちだったグローバルヘルスに、本来あるべき「目的」と「意義」を再定義する。「健康であることの目的は何か」「人間らしい豊かな人生がどのようにあるべきか」ということを問うものである。

The ONE Campaign が発表した『Hope Report 2026』では、5 歳未満の子どもの命を守るという基本的人権 (Survive) の確保にとどまらず、すべての子どもや若者が成長し、学び、つながり、社会に貢献できる条件を整える「生存から繁栄へ (Survive-to-Thrive)」という野心を掲げている⁶。この生存から繁栄へのギャップを埋めるために

³ 自分自身の利益やエゴといった「自分」という小さな枠組みを超え、より大きな目的や、他者、自然、大いなるもの (神や宇宙など)、神聖な存在との一体感を覚える、高揚感を伴う意識の状態

⁴ エヴァンスはその空白を「宗教の形をした穴 (religion-shaped hole)」と表現した。

Evans, A. (2024). What do we do about the religion shaped hole? [Podcast interview transcript]. The Examined Life. <https://examined-life.com/interviews/alex-evans/>

⁵ G20 South Africa. (2025, November 22–23). G20 South Africa summit: Leaders' declaration (para. 2). <https://www.g20.utoronto.ca/2025/251122-declaration.html>

⁶ Kulig, E., & de Souza, S. (2026). The Hope Report 2026: A chance for every child. The Global Goals / Project Everyone & The ONE Campaign. https://globalgoalscms.co.uk/wp-content/uploads/2026/05/HS572-PE-Child-Survival-Report_DIGITAL_AW.pdf

こそ、精神的な知恵の伝統（Wisdom traditions）が不可欠である。それらの伝統は、人間の繁栄を単なる生物学的・経済的な指標へと矮小化することを拒み、問いを開き続けるからである。

そして今、グローバルヘルスが最も必要としているのは「希望」という道徳的な視点である。伝統的なドナーの撤退、エボラウイルス病の再流行、地政学的な緊張など、これまでの数十年の歩みが逆行しかねない困難な時代において、世俗的な開発ロジックだけでは未来への展望を維持しにくい。歴史をリセットできるというユダヤ教のジュビリーの思想、苦しみを転換できるという仏教の理解、誰も孤立させないというウブントゥの信念——これら偉大な精神の伝統は、どんな暗黒期にあっても「希望」を繋ぎ止めてきた。これこそが、今最も求められる実践的な貢献である。

二つの哲学的思想から多国間へ：普遍的な広がり

日本とアフリカの哲学的思想を事例として挙げたが、この対話は日本とアフリカにとどまるものではない。二つの伝統が発展させている対話は、より広い普遍的な対話への扉を開くものである。関係性としての自己、共同体としてのケア、人々の間で起きるものとしての健康——これらはアフリカや日本固有のものであると同時に、キリスト教やイスラム教⁷、さらには見過ごされがちな先住民族の伝統にも共通する、各信仰の根底にある哲学的・精神的基盤である。また、特定の信仰を持たずとも、私たちは皆つながっており、人類の本質は競争よりも協調にあり、己の欲する所を人に施せという生き方は単なる理想ではなく、結局のところ「唯一の生き方」であると理解し実践している世界中の何百万もの善意をもつ人々の心にも深く響くものである。この哲学的・精神的な共鳴はバイラテラル（Bilateral）からマルチラテラル（Multilateral）へと広げていくことが求められる。グローバルヘルスと国際協力が真に目指すべき目的が議論される中で、今日東京で始まった試みが、世界の遠く、深くへと伝播していくことを強く期待する。



⁷ 共通の信仰と帰属意識で結ばれた世界中のイスラム教徒の共同体をウンマ（Ummah）と呼ぶ。

パネルディスカッション

近代の思想・概念枠組みの限界：複雑性と認知限界

グローバルヘルス危機が提起される「根本の課題」は何か。さらに、どのような方法や思想をもって現在のグローバルヘルスの枠組みや議論が抱える課題を乗り越えることができるのか。議論の出発点となる核心的な論点や事例について議論が交わされた。

• 野村 将揮

グローバルヘルスに関連して、哲学的観点から3つの課題を提起したい。

まず一点目に、人間と自然、自己と他者を分ける二元論的な枠組みは、グローバル化・相互依存が深まる現代に機能していないが、人類社会はこの点にきちんと向き合えていない。たとえば、COVID-19の流行下において、我々人類は隣の人の健康状態が自分の健康状態に直結し、ひいては他国の流行状況が自国に影響するということを経験したが、人類社会はこれを踏まえた議論を十分に行えているとは言えないだろう。各論の議論は多いが、大上段として、人類はこのような近代的な概念的枠組みの限界と向き合う必要があるだろう。

二点目に、SNSの普及やAIの発展に伴う「過度な単純化（oversimplification）」を受けて、複雑で難しいものを複雑なまま考え続ける知的態度が人類社会から失われつつある。効率重視で概要だけをすくい取る風潮においては、物事の根底にある「意義」そのものが切り捨てられていく。言わずもがな、国際協力やグローバルヘルスの根底にある「意義」は、本来的に複雑なものである。グローバルヘルスが単なる小手先や目先の手段の最適化に終始しないためにも、複雑さを単純化することなく保ち続ける知的態度が求められるだろう。

三点目に、個人の限界を乗り越える際の課題として、自分の身に起きる感覚を介してしか物事を実感できない「身体の限界」と、遠く離れた他者の苦しみを想像しにくい「認知限界」が存在する。これら2つの限界を、教育をはじめとする生身の体験にかかわる制度設計によってどう乗り越えていくかは、グローバルな合意形成における重要な課題だろう。

• 堀場 明子

認知限界に関連して、日本では自然災害への募金は集まりやすいが紛争・難民への募金は集まりにくいという現象がある。これは80年間平和を経験してきた日本人にとって紛争状況を想像することが難しいという認知限界の表れであり、グローバルヘルスへの資金動員の難しさとも構造的に共通している。

• Adrian Lovett

AIの発展に伴う過度な単純化と同様に、ソーシャルメディアの普及により、自分と同じ声ばかりを聴く分断が進む中、多様な「共感」を守ることは極めて難しくなっている。だからこそ、「私たちは何を意図しているのか」という意義を常に問い、安易に単純化せず複雑性を保ち続けるアプローチが必要である。

• 松本 紹圭

サイニック理論（SINIC）で提唱されている「最適化社会の終焉」のように、正解のない不確実な状況に耐え、わからないものをわからないまま保つ力である「ネガティブ・ケイパビリティ（negative capability）」の重要性が増している。また、近代の最適化が進んだ結果、人間は目的を見失い、戦争のように相手を「非人間化」するシステムを生み出した。これに対し、他者の中に自分を映し出して境界線を越えていく態度こそが人間性の本質であり、人類が取り戻すべきものであろう。

⁸ 立石一真らが1970年に開催された国際未来学会で発表した未来予測理論。2005年から2024年までは「最適化社会」であり、2025年からの「自律社会」へ移行するための大転換の時代と予測されている。最適化社会においては、自律社会に向けて人間自身の変容を遂げることの必要性が主張されている。SINICとは“Seed-Innovation and Need-Impetus Cyclic evolution”の頭文字を取ったもの。

- 渋澤 健

日本文化の根底にある「和」の精神は、ゼロイチという二元論ではなく「わからないものをわからないままにしておく」曖昧さを許容する知恵である。世界中で分断が進む現代において、この曖昧さに対する寛容さは国際的な対話と統合に向けた日本固有の貢献になり得る。

経済・資本主義の再設計への示唆：二項対立から融合へ

これまでに提起された哲学的・思想的課題を具体的な社会・経済へと落とし込み、現行の社会システムや資本主義のあり方と共存するための、経済システムの再設計を巡る論点が提示された。

- 野村 将揮

環境・社会・ガバナンス（ESG）投資に代表される議論は、「自然を客体化し、人間と別物として扱う」思想に基づいている。しかし、たとえば、仏教やウブントウの「人間もまた当然に自然の一部であり、自然と一体である」といったような前提とは、根本的なずれがあると言える。この種の思想的な差異を真正面から議論しなければ、新しいコンセプトが普及したとしても、言葉が増えるばかりで課題を生産し強化してきた社会構造は改善されず、本質的な変革にはつながらない。

- 渋澤 健

グローバルヘルスへの投資を促進する経済システムの具体例として、インパクト投資が挙げられる。インパクト投資とは従来の資本主義が持つリスクとリターンという「二次元」の評価軸に「インパクト（課題解決への意図）」を加えた三次元への拡張である。重要なのは課題解決を「おまけ」としてではなく「意図（Intent）」として持つことである。

経済の世界では、渋沢栄一の「論語と算盤」を引用して「バランスが必要」と言われるが、バランスの論理ではどちらかを増やしてどちらかを減らすことしかできない。本質は「融合（インテグレーション）」であり、二項を融合させることで以前には存在しなかった新しい価値を生み出すことである。

また、言葉の選択も重要である。「サステナビリティ」という概念は企業から見ると外部不経済をどう管理するかという他人事になりがちだ。しかし、「レジリエンス」という言葉なら「自社が折れたら困る」という自分事として経営全体が主体的に取り組める。政策やビジネスにおいて、こうした主体性を引き出す言葉選びを行い、資本主義社会へ投資を呼びかけていく必要がある。

信仰・伝統的な思想がもたらす可能性

人間の認知限界や社会の分断といった根源的な課題を乗り越えるため、「信仰や伝統的な思想」が持つ可能性や知恵を巡る論点が提示された。

- 堀場 明子

課題として挙げられた認知限界を乗り越えるプロセスとして、1999年から2004年のインドネシア・アンボン宗教間紛争における「バクバイ・ピース・ムーブメント（Bakubae Peace Movement）」での取り組みが挙げられる。ここでは和平の一步として、両コミュニティの犠牲者の声を聞き、対話の場を作ることから始めた。和平調停の本質は互いに人間性を見つけることであり、それは直接会って話し、ともにご飯を食べることといった、身体的な接触と共同体験を通じて生まれる。

また、思想的な側面から見ても、インドネシアのジャワ哲学、イスラムのハディース、キリスト教は、「光」という象徴を通して深く共鳴している⁹。宗教の教義や文化は異なっている、その根底には、人のために生き、

⁹ いずれも、自らが光となって他者を照らし、人々に益をもたらすことを、人間としての生き方の根幹に据えている。

人間の尊厳を大切にすることという共通の倫理がある。お互いの人間性（Humanity）を見出し、認め合うことが、宗教や文化を超えた和解と協力を支える土台になりえるだろう。

- 松本 紹圭

宗教には一定の力があるものの、留意すべき点もある。制度化された宗教は、「これさえ信じれば救われる」という一種の最適化システムに陥りがちである。しかし、本来の宗教とは「わからないものをわからないまま、抱え広げていく営み」であった。人間性の回復は、こうした制度的な枠組みを超えた開かれた場所で考えていく必要がある。

TICAD 10 で発信すべきメッセージと実装に向けたアプローチ

本プラットフォームでの議論を踏まえ、次回の TICAD10 に向け、日本および国際社会が発信すべき具体的なメッセージとして以下の点が挙げられた。

- 野村 将揮

国際協力を行う際、資金援助やインフラ支援といったハード面の支援を行うだけでなく、そこに思想や精神性を結びつけて伝えていくことが重要だろう。これまでの日本による支援には、いわば「日本的な価値観」がうまく込められているとは言い難く、国際的なプレゼンスやリスペクトにつながっていない。インフラ支援を介して日本の価値観を共有していくような工夫の余地があるのではないか。現地と日本の価値観を融合・可視化させることで、人々への伝わり方は劇的に変わるはずだ。また、今日この場で交わされているような精神性や哲学に関する議論をグローバルヘルスに接続して思考できる人材や機会を、国際機関に戦略的に配置・創出していくことも必要だろう。グローバルヘルスをグローバルヘルスの議論で完結させない意識が重要と言える。最後に、「哲学」という言葉自体が西洋の知的伝統の方法論を指すものであるため、アフリカや日本の思想的伝統を論じる際には「思想」「文化」「概念」といった言葉を選ぶなど、繊細に留意しながら議論を進めていくことも必要だろう。文化的な側面を利用して社会的・経済的関係の不均衡・不平等を生み出す、広い意味での文化帝国主義のような暴力性にも自覚的であるべきだ。

- 渋谷 健

次回の TICAD10 は節目であると同時に TICAD の意義が問われている時期でもある。2013 年横浜で開催された TICAD5 において、「援助から投資へ」の方針転換¹⁰を打ち出して以降、日本からアフリカへの直接投資は実際には増えていない。TICAD の原点である「アフリカの主体性を軸にしたパートナーシップ」に立ち返ることが必要である。経済安全保障や自由で開かれたインド太平洋（FOIP: Free and Open Indo-Pacific Strategy）の議論においても、その上に「意義」のレイヤーを加え、首相・外相レベルの発言に組み込むことを TICAD10 に向けて提言すべきである。

- Adrian Lovett

TICAD に限らず、正式な外交プロセスはその構造自体が元々の希望や野心を限定してしまうことがある。例え

¹⁰ 2013 年に開催された TICAD5 の場で、当時の安倍首相は、アフリカ諸国はもはや援助を必要とせず、同地域の人材育成とインフラ整備は将来への魅力的な投資であるとした。

外務省。（2013 年 6 月 3 日）。「第五回アフリカ開発会議（TICAD V）概要と評価」。外務省。

https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/page5_000187.html

外務省。（2013 年 6 月 3 日）。「横浜宣言 2013：躍動のアフリカと手を携えて」。外務省。

https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/page3_000209.html

ば、「光」「喜び」「希望」といった人類が共通して語り合える言葉をアジェンダに意図的に組み込むことが一助となりうるだろう。また、**The ONE Campaign** の名前に込められた「One, not the same（一つだが、同じではない）」というメッセージも首脳宣言などを通して世界に広がるべきである。

- 堀場 明子

ローカルな言葉を使いながら相手の文化的な深層に響く共通項を見つけるというアプローチは大変重要であり、**TICAD10** においても、アフリカ各地のローカルな言葉でヒューマニティを語ることが有効である。

- 会場からの発言

アフリカにはウブントゥのみならず、多様で重要な哲学的伝統が存在している。アフリカ全域の人々に自分事として感じてもらうためには表現上の工夫が **TICAD10** に向けては必要ではあろう。

結び：継続的な対話が紡ぐ今後のロードマップ

日本とアフリカを起点に、グローバルヘルスの精神的・思想的な基盤を問い直す対話の場として、本プラットフォームは立ち上げられた。そのキックオフとして交わされた今回の議論は、私たちが共有すべき「精神性」や「意義」を深く掘り下げるための重要な出発点である。今日、世界が直面するグローバルヘルス危機を乗り越えていくには、単なる資金調達による解決に終始するのではなく、その援助や関わりの意義そのものを問い直すことが不可欠である。これまで見落とされがちであった思想的・精神的な基盤を見つめ直し、各地域に通底する知恵を生かしながら、現行の社会システムや資本主義のあり方と共存しつつも、それらを動かす「意義や目的」を問い直す対話を広げていく。

本プラットフォームは、この出発点を一過性の議論に終わらせないため、今後、二つのタスクフォースを通じて対話の深化と具体化を並行して進めていく。

一つは、「知の醸成タスクフォース」である。日本の縁起とアフリカのウブントゥの共鳴を起点としつつ、東南アジアの和平構築の実践やイスラムの死生観をはじめ、世界各地の思想的・信仰的・文化的な営みに宿る知恵を、継続的な対話を通じて集めていく。複雑なものを複雑なまま考え続ける議論を、継続的に積み重ねていく場である。

もう一つは、「TICAD 提言タスクフォース」である。参画する有識者が中心となり、知の醸成タスクフォースで交わされた問いや論点を整理・抽出し、2028年に日本が主催する TICAD 10 に向けた実践的な提言へと具体化していく。次回 TICAD が掲げるべきテーマそのもの、あるいはその根底に通底すべき主題として、今回議論されたような「意義」や「精神性」の視座を提案し、政策・外交の言語へと接続することを目指す。

この二つのタスクフォースは、切り離されたものではない。問いを深める議論と、そこから具体的な提言をまとめる議論とが行き来することで、思想が抽象論に閉じることも、提言が精神的な基盤を欠いた手段論に瘦せ細ることも防がれる。多様なバックグラウンドを持つ有識者の知見や、世界各地で養われた豊かな思想を取り入れながら、既存の外交や支援の枠組みを超え、人類共通のヒューマニティを基盤とした対話を深めていく。



Background and Purpose

Global health stands at a moment of structural transformation. The retreat of traditional donors, most notably the United States Agency for International Development (USAID), along with those of other Western-led bilateral partners, the paradigm shift from aid to investment, and, above all, the growing assertion of African agency, together with the imperative to correct the cost of capital in Africa and to develop new modalities of development finance, are collectively prompting a fundamental reassessment of established frameworks across both policy and finance.

It is important to recognize that the rise of African agency extends well beyond a reordering of the principal actors in funding arrangements or a redistribution of authority in development decision-making. What is being articulated from the African side is something far more fundamental: a questioning of received conceptions of the human person, of health, of community, and of the very purpose and intended beneficiary of development itself. Philosophical traditions of human relationality are posing a deeper set of questions to the discourse of policy and finance. These are not abstract philosophical enquiries. The evidence from global health practice repeatedly demonstrates the existence of phenomena that technology and financial resources alone cannot address. Vaccine uptake is determined not merely by issues of supply and logistics, but by trust and collective deliberation within communities. The quality of palliative and end-of-life care depends as much on the involvement of family, community, and religious practitioners as on medical technology itself. Across mental health, maternal and child health, and infectious disease response alike, the dimensions of human relationship, trust, and meaning play a decisive role that dimensions that the design of health systems alone cannot encompass.

The language of technical solutions and financial engineering is insufficient to address these phenomena. What is at stake is a question of a spiritual and ethical order: how human beings engage with the birth, ageing, illness, and death of others, what Buddhism refers to as *shōrōbyōshi*, the fundamental suffering inherent in the human condition. This dimension has always underlain global health; it is now being rendered newly visible in the context of the current paradigm shift.

Since the modern era, medicine and public health have accumulated remarkable achievements through progressive specialization. By situating the phenomena of birth, ageing, illness, and death within the frameworks of technology and institutions, humanity has achieved the suppression of infectious diseases, the extension of life expectancy, and the expansion of access to healthcare. At the same time, as specialization has deepened, the space for bridging medicine with adjacent domains, family, community, religion, and ethics, has become increasingly difficult to sustain as a forum for deliberation. There is a growing recognition at the frontier of health policy that the challenges now emerging cannot be addressed without dialogue with precisely these adjacent fields.

In this context, Japan and Africa share an intellectual common ground that has too often been overlooked. The Japanese philosophical tradition of *Engi* — the concept of dependent origination and the non-separateness of self and other, a relational understanding of the human person that runs throughout Japanese culture — and the Ubuntu philosophy of southern Africa — ‘I am because we are’ — are both traditions that conceive of the human being not as an isolated individual but as an entity constituted through relationship with others. Although they have developed independently, they resonate deeply in their shared understanding of birth, ageing, illness, and death as communal and relational practices.

The present platform takes this philosophical resonance between Japanese Engi and African Ubuntu as its point of departure, constituting an open space for dialogue that connects the questions arising from this resonance to the contexts of global advocacy, faith-based ethics, and development practice. Analogous forms of wisdom are to be found within philosophical, religious, and cultural traditions across the world. The accumulated practice of peace-building in conflict-affected regions of South-East Asia represents an endeavor to restore relationship between communities in opposition, and embodies distinctive wisdom concerning life and death, forgiveness, and coexistence. The Islamic tradition, too, possesses a rich understanding of mutual aid within the umma, the community of the faithful, and a profound theology of life and death articulated within the context of a community of faith. These resonate with both Ubuntu and Engi. Through sustained dialogue, the platform will work to excavate these forms of wisdom from across the world and to extend the map of resonance.

Beginning with this event, the platform will convene deliberations across government, industry, academia, and civil society, drawing together expertise from health policy, development finance, medical anthropology, philosophy, and faith-based ethics, with the aim of contributing to the Tenth Tokyo International Conference on African Development (TICAD 10), to be hosted by Japan in 2028.

Co-Designers

This platform and program have been developed with the participation of the following co-designers:

Alaa Murabit (Commissioner, Lancet-Georgetown Commission on Faith, Trust & Health / UN SDG Global Advocate)

Adrian Lovett (Executive Director for the United Kingdom, Middle East & Asia-Pacific, The ONE Campaign)

Ken Shibusawa (CEO, Shibusawa and Company, Inc. / Chair, the Japan-Middle East/Africa Relations Committee, Keizai Doyukai)

Masaki Nomura (Doctoral Researcher, Harvard University / Executive Advisor and Chief Strategist, Kyoto Institute of Philosophy)

Ryoji Noritake (Chair, Health and Global Policy Institute / Co-founder, Human Activity Research Laboratory)

Akiko Horiba (Director, Center for Mediation Support, Sasakawa Peace Foundation)

Shoukei Matsumoto (Buddhist Monk / Professor, Faculty of Well-being, Musashino University)

Wakanyi Hoffman (Founder, African Folktales Project)

Event Overview

- **Date & Time:** Monday, June 15, 2026, 13:00–15:00 JST
- **Format:** In person (no virtual attendance available)
- **Venue:** International House of Japan (5-11-16 Roppongi, Minato-ku, Tokyo)
- **Languages:** Japanese and English (simultaneous interpretation provided)
- **Host:** Health and Global Policy Institute (HGPI)

Program

Names listed in Japanese alphabetical order; honorifics omitted.

13:00–13:05	Opening Remarks Ryoji Noritake (Chair, Health and Global Policy Institute / Co-founder, Human Activity Research Laboratory)
13:05–13:30	Keynote Presentations Shoukei Matsumoto (Buddhist Monk / Professor, Faculty of Well-being, Musashino University) Adrian Lovett (Executive Director for the United Kingdom, Middle East & Asia-Pacific, The ONE Campaign)
13:35–14:55	Panel Discussion <u>Panelists</u> Adrian Lovett Ken Shibusawa (CEO, Shibusawa and Company, Inc. / Chair, the Japan-Middle East/Africa Relations Committee, Keizai Doyukai) Masaki Nomura (Doctoral Researcher, Harvard University / Executive Advisor and Chief Strategist, Kyoto Institute of Philosophy) Akiko Horiba (Director, Center for Mediation Support, Sasakawa Peace Foundation) Shoukei Matsumoto <u>Moderator</u> Ryoji Noritake
14:55–15:00	Closing Remarks Shoukei Matsumoto



Keynote Address (1)

Shoukei Matsumoto (Buddhist Monk / Professor, Faculty of Well-being, Musashino University)

The Deeper Questions Beneath the Funding Crisis in Global Health

Global health is in crisis. A convergence of factors, such as the contraction of official development assistance by major governments, geopolitical instability, and others, has produced acute disruption. Much of the ensuing debate has converged upon the question of financing. Yet viewed from the perspective of Buddhism, which has accompanied human beings through birth, ageing, illness, and death for some two and a half millennia, a deeper question lies beneath that debate: how do we care for the birth, ageing, illness, and death of others who are, ostensibly, unrelated to ourselves? Modern medicine and policy are organized around the autonomous individual. We measure, treat, and seek to deliver services to individuals, and as a consequence of this orientation, life expectancy has increased and disease has been contained. Yet whether or not a vaccine is administered depends not only on the logistics system, but on the trust and cohesion that a community itself possesses. This is precisely why, at this moment, we are called upon to question the field of global health from the vantage point of what might be termed the dimension of spirituality, a dimension that data and institutional frameworks cannot fully grasp or measure.

The Resonance of Engi and Ubuntu: ‘The Human Being Emerges from Relationship, Not Isolation’

As one resource for restoring a spiritual dimension to global health, the foundational Buddhist concept of Engi, dependent origination, offers a point of departure. Engi holds that all things arise from relationship: nothing can exist in isolation. The Zen teacher Thich Nhat Hanh rendered this concept in English as ‘interbeing’, indicating that we human beings are not separate entities but are always ‘being together’. A concept that resonates deeply with Engi is Ubuntu, originating in the southern regions of Africa. Known through the formulation ‘I am because we are’, Ubuntu differs from Engi in its historical and linguistic origins, yet resonates profoundly in affirming that the human being emerges from relationship and connection, not from isolated individuality. These two philosophical traditions share a perspective that calls for us to look beyond the individual-centered premises of modern medicine and policy, and to reframe the boundaries that have been drawn between medicine, family, community, and faith, not as divisions or antagonisms, but as opportunities for ‘resonance’ through which relationship may be rewoven.

Be a ‘Good Ancestor’

Ubuntu and Engi, as cultivated by their respective cultures, are not merely legacies of the past but living languages held in common within the practice of global health. We should not confine them as treasures belonging only to particular regions, but should place them at the foundation of our daily work as shared resources for all humanity. Health and medicine are not the exclusive concern of those alive today. The healthcare of today is inherited by the next generation; the decisions made in health policy and development assistance are already shaping the birth, ageing, illness, and death of generations yet unborn. We must acknowledge this responsibility that extends across generations, and by drawing upon Engi and Ubuntu as common assets of humanity, aspire to become ‘good ancestors’ who help to shape a better future for humankind.

Keynote Address (2)

Adrian Lovett (Executive Director for the United Kingdom, Middle East & Asia-Pacific, The ONE Campaign)

The Crisis of Meaning in Global Health and International Cooperation

Global health and international cooperation are currently confronting a critical juncture. On the surface, what is raised is a funding crisis, such as the withdrawal of support by major governments. Yet the essence of the problem lies deeper: the philosophical and spiritual foundations that give people reason to care for one another are being eroded. There is abundant discourse on the ‘means’ — building health systems, mobilising finance — but a critical deficit of discourse on the ‘ends’: what health is for, and what it means for human beings to flourish. This crisis cannot be resolved by the injection of funds alone. What is required is the reconstruction of the ‘meaning’ that underlies all efforts at engagement.

The Moral Practice and Social Value Generated by Religious Communities

A successful example of such a reconstruction of meaning is the Jubilee 2000 campaign, which unfolded from the late 1990s into the early 2000s. This international movement sought the cancellation of unpayable debt held by the world’s poorest countries, with the purpose not of debt repayment but of redirecting resources to hospitals and schools, thereby advancing global health. Yet for years, however compellingly the economic rationale was presented, governments refused to act.

The turning point came with a change of narrative: drawing on the concept of ‘Jubilee’ from the Hebrew Bible, the idea of cancelling debts and liberating people from bondage approximately every fifty years, the movement reframed debt as injustice and its cancellation not as charity but as the practice of justice. This language resonated powerfully even with those who held no particular religious belief, and governments began to respond. The result was Jubilee movements in forty to fifty countries and the eventual cancellation of nearly one hundred billion dollars in debt.

Faith also possesses a practical efficacy. Research by BOND, the UK’s international development network, has found that one pound of external investment channeled through religious communities generates twenty-eight pounds of social value.¹¹ The evidence demonstrates both their high degree of trust and legitimacy in areas that governments and NGOs cannot reach, and their formidable capacity for action on the front lines of crises such as the recent Ebola outbreaks. It must be acknowledged, however, that faith-based actors can also reinforce harmful norms; this dual character must be recognized in designing any partnership with religious communities.

The Role of Faith and Meaning in Global Health

The ONE Campaign is not a religious community, but works in close partnership with faith leaders. This is because, in practice, when the language of faith enters discussions of global health and poverty, those discussions are elevated to a different register. Why does the language of faith possess such power to move even international politics and field-level practice? The social psychologist Jonathan Haidt¹² offers two observations. First, religious communities possess language

¹¹ Tearfund. (2023, March 26). Churches are the local superheroes of international development, creating £28 worth of social value for every £1 invested, study shows. <https://www.tearfund.org/stories/media/press-releases/2023/03/churches-are-the-local-superheroes-of-international-development>

¹² An American social psychologist. According to Haidt’s Moral Foundations Theory, human beings possess six moral foundations: care, fairness, liberty, loyalty, authority, and sanctity. In societies that are Western, Educated, Industrialised, Rich, and Democratic—commonly referred to as WEIRD societies—the moral domain tends to become narrower, with greater reliance primarily on the foundations of care and fairness. By contrast, the majority of non-WEIRD societies, including religious communities, draw upon all six foundations, including loyalty, authority, and sanctity. Haidt argues that WEIRD institutions have consequently lost touch with these broader moral languages.

and thought concerning ‘sanctity’, ‘loyalty’, and ‘self-transcendence,’¹³ dimensions that have been consistently undervalued by the Western institutions that have designed global health. Second, religious communities continuously provide the conditions that activate what Haidt calls the ‘hive switch’, through shared ritual and collective experience, the capacity to feel oneself part of something larger than one’s individual self, transcending personal self-interest. This is why, at moments of difficulty within healthcare systems, those who lead religious communities are indispensable.

The writer Alex Evans has observed that when faith no longer performs its traditional functions, the collective construction of meaning, the processing of grief, and the provision of a sense of belonging to a community, a void opens at the center of society’s collective capacity to face crises.¹⁴ The contraction of global health support by major governments is one manifestation of this: it represents not only a funding crisis but the collapse of a shared narrative about why global health matters and for whom it exists. The crisis of global health is not resolved by the replenishment of funds as a means; it requires the reconstruction of meaning and purpose as the animating end.

From Faith to the Depths of Human Ontology: Resonant Philosophical and Spiritual Foundations

Behind the question of what faith and religious communities do lies a deeper philosophical question: what kind of beings are human beings? Ubuntu, for instance, is not a faith tradition but a philosophical and spiritual claim about the nature of the human person. As the Kenyan philosopher John Samuel Mbiti expressed it: ‘I am because WE are and, since we are, therefore I am’ — the self does not exist as an independent starting point but is constituted through relationship and connection with others.

The communiqué of the Johannesburg G20 Summit of November 2025 declared: ‘In the spirit of Ubuntu, we recognize that no individual nation can prosper in isolation.’ This was a moment at which an African philosophical tradition was placed at the center of the world’s most powerful economic forum.¹⁵

Ubuntu and Japanese Engi together suggest a point of departure fundamentally different from that of contemporary global health: not the Western approach of ‘how do we deliver services to individuals?’, but a shift towards the relational question of ‘how do people support one another through the passages of life?’

From ‘Survive’ to ‘Thrive’: The Power of Hope

Understanding the human being through the lens of ‘relationship’ with others redefines for global health, which has tended to confine itself to the discourse of means, the ‘purpose’ and ‘meaning’ that ought properly to animate it: asking what health is for, and what a richly human life might look like.

The ONE Campaign’s ‘Hope Report 2026’ sets out an ambition that goes beyond the fundamental right to survival (Survive), protecting the lives of children under five, to embrace a ‘survive-to-thrive’ vision: ensuring the conditions in

Haidt, J. (2017, October 19). The psychology of self-righteousness [Radio interview transcript]. On Being with Krista Tippett.

<https://onbeing.org/programs/jonathan-haidt-the-psychology-of-self-righteousness-oct2017/>

Schuman, J. (2018, July 15). Understanding political differences through moral foundations theory. Divided We Fall. <https://dividedwefall.org/the-righteous-mind-moral-foundations-theory/>

¹³ A heightened state of consciousness characterized by a sense of unity that transcends the narrow framework of the self—including one’s own interests and ego—and extends towards a greater purpose, other people, nature, something greater than oneself (such as God or the universe), or a sacred presence, often accompanied by a profound sense of elevation or transcendence.

¹⁴ Evans describes this absence as a “religion-shaped hole.”

Evans, A. (2024). What do we do about the religion shaped hole? [Podcast interview transcript]. The Examined Life. <https://examined-life.com/interviews/alex-evans/>

¹⁵ G20 South Africa. (2025, November 22–23). G20 South Africa summit: Leaders' declaration (para. 2). <https://www.g20.utoronto.ca/2025/251122-declaration.html>

which all children and young people can grow, learn, connect, and contribute to society.¹⁶ It is to bridge this gap between survival and flourishing that wisdom traditions are indispensable. These traditions refuse to reduce human flourishing to mere biological or economic indicators, and continue to hold the question open.

What global health most requires at this moment is hope as a moral orientation. In a period of acute difficulty, the withdrawal of traditional donors, the resurgence of Ebola, geopolitical tensions, the real risk of reversing decades of progress, secular development logic alone struggles to sustain a vision of the future. The great spiritual traditions offer precisely this: the Jewish idea of Jubilee, that history can be reset; the Buddhist understanding that suffering can be transformed; the Ubuntu conviction that no one is to be left isolated. These traditions have sustained hope even through the darkest of periods. This is the most practically valuable contribution they can make today.

From the Bilateral to the Multilateral: The Universal Reach of Two Philosophical Traditions

Whilst the philosophical traditions of Japan and Africa have been taken as illustrative examples, this dialogue is not confined to Japan and Africa. The dialogue that these two traditions are developing opens a door to a broader, more universal conversation. The relational self, care as community, health as something that happens between people, these are not exclusively African or Japanese ideas; they resonate with the philosophical and spiritual foundations at the root of Christianity, Islam¹⁷, and indigenous traditions that are too often overlooked. They also speak deeply to the many millions of people of goodwill across the world who hold no specific faith but understand and practice the conviction that we are all connected, that the essence of humanity lies in cooperation rather than competition, and that the golden rule, treating others as one would wish to be treated, is not a mere ideal but, in the end, the only way to live. This philosophical and spiritual resonance must be extended from the bilateral to the multilateral. As the conversation deepens about what global health and international cooperation truly aim to achieve, there is every reason to hope that what has begun today in Tokyo will propagate far and deep into the world.



¹⁶ Kulig, E., & de Souza, S. (2026). The Hope Report 2026: A chance for every child. The Global Goals / Project Everyone & The ONE Campaign. https://globalgoalscms.co.uk/wp-content/uploads/2026/05/HS572-PE-Child-Survival-Report_DIGITAL_AW.pdf

¹⁷ The Ummah refers to the worldwide community of Muslims united by a shared faith and a common sense of belonging.

Panel Discussion

The Limits of the Modern Conceptual Framework: Complexities and Constraints

The discussion opened with an examination of the root challenges posed by the global health crisis, and of the approaches and ways of thinking that might enable us to transcend the limitations of current frameworks and discourses in global health.

- **Masaki Nomura**

Three challenges may be identified from a philosophical perspective. First, the dualistic framework that separates human beings from nature, and the self from others, is no longer functional in a world of deepening globalization and interdependence — yet humanity has not yet confronted this adequately. During the COVID-19 pandemic, for example, we all experienced how the health of those around us was directly connected to our own, and how outbreaks in other countries affected our own; yet it cannot be said that humanity has engaged in sufficiently rigorous reflection on this basis. There is much discussion at the level of specific issues, but at the higher level of principle, humanity needs to confront the limits of these modern conceptual frameworks.

Second, in the wake of the ‘oversimplification’ brought about by the proliferation of social media and the development of AI, the intellectual disposition of continuing to think through complex and difficult questions in all their complexity is being lost from human society. In a culture that prizes efficiency and skims the surface for summary, the ‘meaning’ at the root of things is progressively discarded. Needless to say, the meaning at the root of international cooperation and global health is inherently complex. If global health is not to confine itself to the optimization of superficial, short-term means, an intellectual disposition that preserves complexity rather than reducing it is essential.

Third, as a challenge in transcending the limits of the individual, there exist what might be termed the ‘bodily limit’, the fact that we can only truly apprehend things through sensations that happen to our own bodies, and the ‘cognitive limit’, the difficulty of imagining the suffering of distant others. How to overcome these two limitations through institutional design, including education and embodied experience, is a critical challenge in building global consensus.

- **Akiko Horiba**

Relating this to cognitive constraint: in Japan, charitable giving for natural disasters tends to be forthcoming, whilst giving for conflicts and refugees is considerably harder to mobilize. This is a manifestation of the cognitive limit experienced by Japanese people, for whom eighty years of peace has made it difficult to imagine situations of conflict, and it shares a structural resemblance with the difficulties of mobilizing resources for global health.

- **Adrian Lovett**

Just as AI development produces oversimplification, so the proliferation of social media is deepening a fragmentation in which people hear only voices that resemble their own. In this context, preserving diverse ‘empathy’ has become extraordinarily difficult. It is precisely for this reason that we need an approach that continually asks ‘what do we intend?’, and that resists easy simplification whilst preserving complexity.

- **Shoukei Matsumoto**

As posited in SINIC Theory¹⁸ and its account of the ‘end of the optimization society’, the importance of ‘negative capability’, the capacity to tolerate uncertainty without resolution, to hold what is unknown in its unknowing, is increasing. Moreover, as modern optimization has advanced, human beings have lost sight of their purpose and have generated systems, such as warfare, that ‘dehumanize’ the other. In contrast, the disposition of seeing oneself reflected in the other and crossing the boundary that divides — this is the essence of humanity and what we as a species must recover.

- **Ken Shibusawa**

The spirit of ‘wa’ (和) — harmony — at the root of Japanese culture is a wisdom that does not insist on the binary logic of zero or one, but permits the ambiguity of ‘leaving what is unclear, unclear’. In an age of deepening division across the world, this tolerance for ambiguity could represent a distinctively Japanese contribution to international dialogue and integration.

Implications for redesigning Economic and Capitalist Systems: From Binary Opposition to Integration

The discussion turned to how the philosophical and conceptual challenges previously raised might be translated into concrete social and economic terms, and what points emerge in thinking about the redesign of economic systems that could coexist with, whilst transforming, the current social order and the character of capitalism.

- **Masaki Nomura**

Debates around ESG (Environmental, Social, and Governance) investment are premised on a mode of thought that ‘objectifies nature, treating it as something separate from human beings’. Yet this stands in fundamental tension with premises such as those of Buddhism or Ubuntu, namely, that human beings are of course part of nature and are one with it. Unless conceptual differences of this kind are addressed head-on, however widely new concepts proliferate, the result will be only an accumulation of new language; the social structures that have generated and reinforced these problems will remain unimproved, and no substantive transformation will follow.

- **Ken Shibusawa**

As a concrete example of an economic system capable of promoting investment in global health, impact investing merits attention. Impact investing extends the traditional capitalist two-dimensional framework of risk and return by adding a third dimension: ‘impact’, defined as the intention to address social challenges. What is crucial is that the resolution of challenges is held not as an ‘add-on’ but as ‘intent’.

In the world of economics, the ‘Analects and the Abacus’ of Shibusawa Eiichi are frequently cited in support of the proposition that ‘balance is necessary’. Yet the logic of balance can only yield more of one thing at the expense of the other. The essence of what is required is ‘integration’, not balance between two terms, but the fusion of them so as to generate value that did not previously exist.

The choice of language is also significant. The concept of ‘sustainability’, from the perspective of corporations, tends to become a matter of managing negative externalities, something that pertains to others rather than to oneself. The word

¹⁸ A theory of the future developed by Kazuma Tateishi and others and presented at the International Future Studies Conference held in 1970. The theory predicted that the period from 2005 to 2024 would constitute an “Optimisation Society”, followed by a major period of transformation leading to an “Autonomous Society” from 2025 onwards. The theory argues that, during the Optimisation Society, human beings themselves must undergo transformation in preparation for the transition to an Autonomous Society. SINIC is an acronym derived from “Seed-Innovation and Need-Impetus Cyclic evolution.”

‘resilience’, by contrast, carries the connotation that ‘if my own organization breaks, I am in trouble’, a framing that enables entire management structures to engage proactively as a matter of their own concern. In both policy and business, we need to select words that elicit precisely this kind of agency, and to use them in calling for investment from capitalist society.

The Possibilities offered by Faith and Traditional Ways of Thought

The discussion explored the possibilities and forms of wisdom that faith and traditional ways of thought offer for transcending the root challenges of cognitive constraint and social fragmentation.

- **Akiko Horiba**

As an example of a process through which cognitive constraint may be overcome, the work of the Bakubae Peace Movement during the inter-communal conflict in Ambon, Indonesia (1999–2004) is instructive. The first step towards reconciliation was to listen to the voices of victims from both communities and to create a space for dialogue. The essence of peace mediation lies in finding the humanity of the other, and that is born through physical contact and shared experience: meeting face to face, eating together.

From a conceptual perspective as well, Javanese philosophy in Indonesia, the Islamic hadith, and Christianity resonate profoundly through the shared symbolism of ‘light’.¹⁹ However different religious doctrines and cultures may be, at their root lies a common ethic: to live for others, to cherish human dignity. It is in finding and acknowledging each other’s humanity that the foundation for reconciliation and cooperation across religious and cultural boundaries may be built.

- **Shoukei Matsumoto**

Whilst religion possesses a certain power, there are aspects that warrant caution. Institutionalized religion tends to fall into a kind of optimization system that promises salvation contingent upon adherence to a particular set of beliefs. Yet authentic religious practice was originally ‘the endeavor of holding what is unclear, opening it out and embracing it’. The recovery of humanity must be pursued in an open space that transcends institutional frameworks of this kind.

Message to be Conveyed at TICAD 10 and Approach to Implementation

Drawing upon the deliberations of the platform, the following specific messages emerged as those which Japan and the international community should seek to advance towards TICAD 10.

- **Masaki Nomura**

In conducting international cooperation, it is not only important to provide hard support in the form of financial assistance and infrastructure, but to connect and transmit ways of thought and spirituality through those engagements. It cannot be said that Japan’s past contributions have effectively embodied distinctly Japanese values in a manner that has generated international presence or respect. There is room to consider how Japanese values might be shared and transmitted through infrastructure support. By fusing and making visible local and Japanese value systems, the way in which what is conveyed is received could change dramatically.

It will also be necessary to strategically place and create opportunities within international organizations for individuals

¹⁹ Both place the act of becoming a source of light oneself, illuminating others and contributing to their wellbeing, at the heart of what it means to live as a human being.

capable of connecting the kinds of discussions of spirituality and philosophy exchanged here today with global health. The awareness that global health must not remain a conversation conducted solely within the bounds of global health is itself important.

Finally, since the word ‘philosophy’ itself refers to the methodology of the Western intellectual tradition, care should be taken in choosing language when discussing the intellectual traditions of Africa and Japan, preferably employing terms such as ‘thought’, ‘culture’, or ‘concept’. We should also be alert to the potential for violence in the broader sense of cultural imperialism, the use of cultural dimensions to produce asymmetries and inequalities in social and economic relations.

- **Ken Shibusawa**

TICAD 10 is both a milestone and a moment at which the very purpose of TICAD is being called into question. Since the shift in direction ‘from aid to investment’ announced at TICAD 5 in Yokohama in 2013, direct investment from Japan to Africa has in fact not increased²⁰. It is necessary to return to the founding spirit of TICAD: a partnership centred on African agency. In discussions of economic security and the Free and Open Indo-Pacific (FOIP) as well, the proposal to TICAD 10 should be to add a layer of ‘meaning’ to these frameworks and to incorporate it into statements at the level of the Prime Minister and Foreign Minister.

- **Adrian Lovett**

Not only at TICAD but in formal diplomatic processes generally, the very structure of those processes tends to constrain the original hopes and ambitions that animated them. One contribution might be to deliberately embed in the agenda language that all of humanity can share in common: words such as ‘light’, ‘joy’, ‘hope’. The message embedded in the name of The ONE Campaign — ‘One, not the same’ — should also be allowed to reach the world through summit declarations and similar vehicles.

- **Akiko Horiba**

The approach of finding shared points that resonate with the cultural depth of the other whilst using local languages is of the greatest importance, and at TICAD 10 as well, giving voice to humanity in the local languages of different parts of Africa would be valuable.

- **Comment from the floor**

Africa contains not only Ubuntu but a rich diversity of important philosophical traditions. In order for people across the whole of Africa to feel that TICAD 10 speaks to their own lives, creative care will be needed in how ideas are expressed.

²⁰ At TICAD V, held in 2013, then Prime Minister Shinzo Abe stated that African countries no longer required aid, and that investment in human resource development and infrastructure across the region represented an attractive investment in the future. Ministry of Foreign Affairs of Japan. (3 June 2013). “Overview and Evaluation of the Fifth Tokyo International Conference on African Development (TICAD V).” Ministry of Foreign Affairs of Japan. https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/page5_000187.html Ministry of Foreign Affairs of Japan. (3 June 2013). “Yokohama Declaration 2013: Hand in Hand with a Vibrant Africa.” Ministry of Foreign Affairs of Japan. https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/page3_000209.html

Conclusion: Roadmap for Continuing Dialogue

This platform was established as a space for questioning the spiritual and philosophical foundations of global health, taking Japan and Africa as its twin points of departure. The discussion that took place at this kick-off event constitutes a vital starting point for a deeper excavation of the ‘spirituality’ and ‘meaning’ that we must hold in common. To navigate the global health crisis that the world faces today, it is indispensable not merely to seek resolution through financial mobilization, but to question the very meaning and purpose of that engagement and those commitments. The platform will continue to examine the philosophical and spiritual foundations that have too often been overlooked, drawing on the wisdom embedded in different regions of the world, whilst deepening the dialogue that questions the ‘meaning and purpose’ that animates and moves current social systems and the character of capitalism, even as it seeks to coexist with them. To prevent this starting point from becoming a one-off discussion, the platform will henceforth advance two parallel streams of work, deepening deliberation and translating it into concrete proposals, through two task forces.

The Knowledge Cultivation Task Force: Taking the resonance between Japanese Engi and African Ubuntu as its point of departure, this task force will gather, through sustained dialogue, the wisdom embedded in philosophical, faith-based, and cultural practices from across the world, including peace-building traditions of South-East Asia and Islamic theologies of life and death. It will be a space for the continuous accumulation of deliberation that holds complex questions in all their complexity.

The TICAD Policy Recommendations Task Force: Led by participating experts, this task force will consolidate and extract the questions and themes addressed by the Knowledge Cultivation Task Force, translating them into practical recommendations directed towards TICAD 10, which Japan will host in 2028. The aim is to propose that the perspectives of ‘meaning’ and ‘spirituality’ discussed today, as the theme that TICAD 10 should adopt, or as the animating spirit that ought to run through it, be connected to the language of policy and diplomacy. These two task forces are not separate endeavors. It is precisely the interaction between discussions that deepen the questions and those that translate them into concrete recommendations that prevents thought from closing in upon itself as abstract theory, and prevents recommendations from becoming thin and purely instrumental — bereft of a spiritual foundation. Drawing upon the expertise of scholars and practitioners with diverse backgrounds, and on the rich intellectual traditions cultivated across the world, the platform will deepen a dialogue grounded in a shared humanity that transcends the existing frameworks of diplomacy and development assistance.





特定非営利活動法人 日本医療政策機構

〒106-0032

東京都港区六本木 5-11-16

国際文化会館内

電話：03-4241-5020 FAX：03-6859-9291

Info: info@hgpi.org

Health and Global Policy Institute (HGPI)

The International House of Japan

5-11-16 Roppongi, Minato-ku

Tokyo 106-0032 Japan

Tel: +81-3-4241-5020 Fax: +81-3-6859-9291

Info: info@hgpi.org